

海外の話題

都市の景観について

農林中央金庫 ロンドン支店長 中山 昌男

以前 B B C で自動車評論番組を見ていたら、キャスターがスカイライン G T R を日本まで取材に行って、「フェラーリなんかに比べても性能抜群で申し分ないんだけど、唯一最大の難点は、この東京の街（と、ここで派手な音楽と共に東京の街の風景が映し出されて）、アメリカの×××（聞き逃した）と並んで世界で最も醜い街 (The Ugliest city in the World) と同じで、デザインが全くいかさないこと」とコメントしていた。何もそこまで言わないでもと一瞬愛国心に火がついてムッとしたのだが、次の瞬間にはそう言われても仕方がないかと悲しく納得していた。

ロンドンなど世界の大都市と比較すると東京の景観は確かに分が悪い。東京の景観に欠けるもの、それは都市のトータルデザインであり統一感ないし秩序だと思う。都市の秩序を実現する仕組みが例えばロンドンには確かにあるようで、ある日本のゼネコンがロンドンに自社ビルを建てようとして入念に設計して当局に建築許可を求めるが、その通りの建物はレンガ造でなければならず、石造では駄目だとのこと。仕方がないので設計しなおして持っていくと今度はセットバックが足りない、これでは通りが暗くなりすぎるという。仕方がないのでまた設計しなおして持っていくと、今度は担当者がホリデー中なので帰ってくるのを待てと・・・。当然法令に合致した内容で設計しているのだが、かくも当局の担当者が街のデザインに権限を持つのが英國のようなのである。

住宅についても同様でこれは私自身の経験だが、前回ロンドンに駐在していた時、家の通りに面した窓を、寒い冬をしのぐために大家との長い交渉の末ようやく二重窓に替えてもらったところ、しばらくして役所から手紙が届いた。内容は「お前は無許可で窓のデザインを変えてけしからん」。英國では自分の家の窓一つ替えるのにも許可が必要なのである。

実はこの話には続きがあって、今回数年ぶりにまたロンドンに着任して懐かしいので昔住んだ家に行ってみたら、驚くべし窓が元のデザインにもどっているではないか。英國の役所そして住民はかくも厳しく町の景観にこだわるのである。

英國における不動産の所有権は使用権にむしろ近い限定された内容なのだが、こうした私権の制限は法律に明定されていなくとも当局の担当者に責任と権限を与えることで実施しているということだろう。制限されるほうは不自由なばかりか、基準があいまいで不便このうえないわけだが、結果統一感のある、美しい街並みが実現しており、かたや日本では法で規制する側とその抜け道を探し出す側とのいたちごっこで、結局ペンシリビルのようなものが建って混沌とした状況になってい

ることを考えると、窮屈さを皆で分かち合う社会がむしろ羨ましくなる。

おしなべて日本は社会の利害と個人の利害の調整が不得手で、社会の利害を代表する行政と個人が対立して身動きが取れなくなるようなことが往々にして起こるのだが、不動産がらみでとりわけそれが顕著である。成田空港は開港以来 30 年近く経つというのに未だに片肺飛行のような状態で、最近はさすがに恥ずかしくなってきたのか、国際ハブ空港を目指すというかけ声すら聞こえなくなった。戦後 60 年を経てマッカーサー道路がついに着工にこぎつけるというのが、実は地下にトンネルを通すというのでは、あの低層雑居ビルの帶は一体何だったのかということになろう。

だからこうすれば良いという道筋が見えてこないのが悲しいところだが、前回も書いたのだが日本の経済が相対的に優位を保ちフローが回っている今のうちに何とかしておかないと、これは将来ひどいことになるのではないかと本当に心配している。